覗く眼

第13回

「アメリカ、だな」
戦後の日本を一時的に支配下に置き、その後の道筋をつくり、同盟国として最も関わりの深い国、アメリカ。日本の政権とも密接に関わり影響力を行使できる国など、ここをおいて他にない。
「どうなんだ」
源治は厳しい目で、八代を睨んだ。八代は少しも気圧される風ではなかったが、
「その通りです」
と素直に頷く。
「お前たち、日本人に何も言わずアメリカにこんな協力をしてやがるのか」
源治の激しい怒りそのものをあざ笑うように、八代はこれまで以上に顔を歪めた。
「大内さん。あなた先ほど『時代錯誤』と言いましたね。今おっしゃった事こそ、時代錯誤の極みではないですか？」
「なんだと！」
八代の不遜な態度には、もう慣れた。今はそれよりも、今言われた言葉そのものが気に食わない。
「だってそうじゃありませんか。あなたの言い方だと、まるでアメリカと日本が対等だ」
「当たり前だ。独立した国同士なんだぜ」
八代は心底呆れたように、大きなため息をつく。
「戦争の真っただ中を生きたあなたのような人が、これだ。まったく、時の流れというのは恐ろしい」
「何だと？」
八代はまた小さなため息をつく。
「良いですか。敗戦国の日本は時代が時代ならば、属国です。今は時代が違いますが、それでも連合国による分割統治をされていても文句は言えなかった。それを、アメリカが助けてくれたのです」
「そりゃお前、終戦間際はほとんどアメリカと戦争をやってたようなもんだ。そんな御為倒しの理屈言われたって、日本がアメリカの属国であって良いはずがねえ」
「大内さん、確かに我々の実質的な相手はアメリカでした。他の国々が疲弊していて占領政策に力を割けなかった面もあります。けれども、こんなちっぽけな島国を独占する事に固執する意味が、どれほどありますか？」
確かに、戦後処理に関しては不透明な部分が多い。そして戦後の日本の急激な発展は、いくつかの偶発的な要素も絡んでいるとはいえ、アメリカの大きな助力があったからこそだ。復興に追われてきたのと、日米安保など目の前で起こる出来事に捉われ、これまでそんな戦後の経緯をまじめに考えることがなかったのは、源治だけではないだろう。
「アメリカは日本の中に興味深いものがある、と認めた。それが答えです」
「それがこの、悪魔のような研究か」

源治は思わず、目の前の殺人鬼、八代が言った毒ガス、生物兵器、原爆などの研究を思い浮かべ、“悪魔”と形容した。
「その通りです」
八代は素直に頷いた。
「だがよ、てめえ。それが国民を騙していいって理屈にはならねえぜ」
すると八代は、源治にこれまでにない厳しい目を一瞬向けた。
「大内さん。ハッキリと申しあげましょう。我々の研究があったからこそ、日本人はこれまでと同じ形で存在する事ができたのです。感謝しろとは申しませんが、思い上がるのは止めて頂きたい」
源治は初めて、八代に気圧された。そしてこの理屈がわかってなかった訳でもない。ただどうしても、認めたくはなかった。
「良いですか。植民地時代ではないですから、表面上は日本は独立国であり、アメリカとは同盟関係です。けれども今後日本が経済的に発展すればその利益はアメリカに渡さねばならない。極東で軍事衝突が起これば、日本列島のどの場所であっても基地として明け渡さねばならない」
八代は心底腹を立てているのか、いっきに捲し立て、さらにこう続けた。
「それが嫌ならば、日本はもう一度戦争をする事です。そして今度は、勝つことです」
そして最後に悪戯っぽく顔を歪め、付け加えた。
「まあ、日本が勝つ事など絶対に無理ですがね」

　源治はようやく、我に返った。八代に気圧されていた自分を恥じてか、皮肉っぽく口を開いた。
　「ふん。アメリカにも勝てるんじゃねえのか。こんな素晴らしい研究をしてるんだからな」
　それに対して八代は（わざと言ってらっしゃるんだと思いますが・・・）と鼻で笑い、答えた。
　「この研究だけで戦争に勝つことなど、あり得ません。アメリカの圧倒的な軍事力と合わせることで、これは脅威となるのです」
　源治も本気でアメリカに勝てるなどと思っていた訳ではない。だから返す言葉が、見つからない。
　「例えばこいつを使い敵国の主要都市、そのいくつかで虐殺をおこなう。いきり立ってみたら後にはマメリカの軍事力があるようだ・・・これで直接的な武力衝突は避けられますよ。今回の戦争みたいに疲弊する事無く、勝利することができるのです」
　源治は想像した。自分たちに脅威があっても、それに下手に抵抗すればもっと圧倒的な力で攻め込まれる。刀折れ矢尽きるまで戦うことができるほど、国家という集団は強くない。
　八代の声により、源治の想像は遮られる。
　「それに優れた兵器を持っていても、うまく戦術を組まねば力など発揮できません。終戦間際のアメリカの駆け引きは、実に見事だったでしょう？」
　「それじゃあ・・・」
　源治の頭の中に、空襲や焼け野原となった町、そして原爆の光景が浮かんできた。
　「少し話が学術的になりましたね。つまりは刑事さんの職務には関係ないという事です。何しろこれは、高度な外交、いや統治国の国策なのですから。あなた達の寄る辺とする日本の法律など、入る余地はないのです」
　「ふざけるんじゃねえ！」
　八代の言葉に反射的に反応するように、源治は怒鳴り声をあげた。

「大内さん、私はあなたが何に苛立ってるのかがわかりませんね」
冷めた八代の声は、源治の苛立ちをいっそう際立たせる。
「権力の側ってのは、いつもそうだ。人の命や庶民の生活ってのを、平気で踏みにじりやがる」
源治の頭に、これまで真相を掴み告発する事ができなかったいくつもの国、清治絡みの事件のことが過る。
「ふむ、気持ちはわかる。けれどもご説明した通りだ。あなたがこれまでに携わってきた事件のいくつか。そしてこの村の事。洗いざらい証明するのは結構ですが、その事により“日本”という国は不利益を被る」
「ふん、政治家みたいな事をぬかしやがるぜ」
「何と言われても結構。しかし目先の正義感のために国が危険に陥る事など、誰も望みませんよ」
完全に理性だけで判断すれば、わからないでは無かった。源治を今動かしているのは、正義感だ。けれども自信のプライドやこれまでの刑事人生の証明。そんな自我が全く無いとは言い切れない。
「けれども、ご安心ください。この村はもうすぐ無くなる」
八代は急に、おかしな事を言う。
「どういう事だ？」
これには源治も面喰らい、思わず聞き返す。
「日本も復興して、こんな方法で隠すのが難しくなってきました。今度の件にしても、そうです」
「あの殺人だな」
八代たちがおこなう人体実験は、源治にとっては殺人でしかない。
「はい。これまではばれる事はなかった。村の人間は皆、黙認している事ですからね。しかしこんな辺鄙な場所にも、他所者が入り込んでくるようになった」
「車社会だしな」
八代は頷きながら、続けた。
「道路も整備されてきた。この流れは続きます。日本は狭く、町や村は均一化してきます。土着に埋もれさす隠し方は、もう不可能です」
「何も知らないドライブ帰りの他所者に殺しを目撃されるとは、ヘマしやがったな」
源治は嘲笑う。
「他所でも最近、いくつかあったのですよ。おかしな臭いがするとか、変な施設を見た、とかね」
「ふん。そこには俺みたいなでしゃばりの刑事はいなかったか」
「ええ」
それはおかしなモノに目をつぶる、上からの命令にただ素直に従うという警察組織に対する皮

肉でもあったが、八代は警察になり変わるように、悪びれる様子も無く頷いた。
「この村はどうなる？」
「ダムができ、沈んでいく村のように早晩、消えていくでしょう」
八代にとって、この村もマルタもただの捨て駒でしかないらしい。いや、日本国やアメリカにとって、と言うべきか。